

聖岡頓教判の成立について

浄土宗第七祖了普聖岡が組織した教判は二藏二教二頓判であり、相頓教＝浄土宗義を主張するものである。その主張の中心は頓教のことであり、即ち「頓教判の成立」と云った場合、二藏二教二頓の広義と、性頓相頓の頓教判の狭義の二面が考えられる。ここではこの両面から、聖岡教判の成立過程を考察したいと思う。

広義の二藏二教については、浄土教では淨影寺慧遠が『大乘義章』に二藏三教を掲げ、菩薩藏に分類しているのを受けて、善導が二藏二教を示している。これは『觀經疏』『般舟讚』『觀念法門』にあり、聖岡の教判もこの『觀經疏』にある、『問日此經二藏之中、何藏撰二教之中、何教収答日今此觀經菩薩藏取頓教撰』

の文から導かれている。

特に二藏については三祖良忠が『伝通記』に

「小乘名声聞藏、亦名半字教、大乘名菩薩藏、亦名滿字教、二藏者嘉祥疏引智論一云文殊阿難於鉄圍山結集、摩訶衍為菩薩

聖岡頓教判の成立について（服部）

服部 淳 一

薩藏、迦葉阿難於王舍城結集、三藏為声聞藏、已撰大乘論一云由上下乘差別、故成三種、謂声聞藏菩薩藏、淨影云教声聞、法名声聞藏、教菩薩、法名菩薩藏、已。

と、嘉祥の『觀經疏』、『撰大乘論』、『大乘義章』によって二藏の概念規定をしており、浄土宗においても通念として確立していたことを物語るもので、聖岡も、

「藏者即是包藏之義、言有空小乘包藏、名為声聞藏、也漸頓大乘包藏、名為菩薩藏、也」

と、その説を継承している。

狭義の頓教については、頓漸二教として『法華玄論』にある慧觀の説に始まり、中国仏教において数多く展開されている。これを大別すると、

- (1) 『華嚴經』のみを頓教とする。
- (2) 『華嚴經』を含めた經典を頓教とする。
- (3) 機根の利鈍によって教相を經典を含めて判決する。

の三つに、その展開を大別することができる。(1)にあてはまるのが、慧観、劉虬、法雲等であり、(1)から(3)へと展開したのが北魏の慧光であり、(2)にあてはまるのが智顛であり、(3)が慧遠、善導等である。

法然においては、『無量寿経釈』の文に

「天台眞言皆名二頼教、然、彼、断惑証理、故、猶、是、漸教也、明、未、断惑、凡、夫、直、出、遇、三、界、長、夜、者、偏、是、此、教、故、以、此、教、為、頼、中、之、頼」とあり、聖阿もこの文を典拠としている。

二祖聖光においては『浄土宗要集』に

「浄土門頼教者善導和尚以三寿経観経弥陀経、自三大蔵経中選出之、往生極楽頼教、給依之三部、往生経中、弥陀、名号、行命終之時弥陀、来迎預往生極楽、遂以頼中頼」と、浄土宗における頼教を示し、

「此正意本意、念仏往生頼中頼、是浄土門、頼教一乘也、以聖道門、頼教一乘、不可難」

と、浄土宗の頼教と他の頼教と内容の異なることを云い、従来の頼教説を継承しているわけではなく、頼教＝念仏往生の、聖光教学の結論である結帰一行三昧を意味している。

前述のように二蔵二教は善導にあり、これについて、

「今略示三師釈義之趣、耳第一若依北魏釈義、以難易二道、可為二教相、云云第二若依西河釈義、以二聖淨二門、應為二教相、云云第三若依光明大師釈義、立二浄土宗、入、下、以二蔵及與二教、而撰中一

代、諸、聖、教、也」

と三師教相義を示し、浄土宗に曇鸞の難易二道判、道綽の聖淨二門判、善導の二蔵二教判があり、全てこの教判に依るべきことを論じている。二道二門判と二蔵二教判との関係については

「先依玄忠、積者於難行道、而有大小、小中有三乘、大中有三漸、漸中有二初後、頼中有二性相、相頼即是易行道也、次依西河、積者於聖道門、而有大小、小中有三乘、大中有漸、漸中有二初後、頼中有二性相、相頼即是浄土門也、今依一家大師、積者声聞藏中、而有三乘、菩薩藏中、即有二漸、漸中有二初後、頼中有二性相、相頼即是、今此宗也、故云菩薩藏頼教、撰、但、是、一、途、也」

とあり、二蔵二教の面から二道二門判を見るならば、同一線上とすることが出来る。この二道二門の会釈は、聖阿のこの教判に対する見方をあらわしたものである。この会釈について、

「選択云、難行道者即是聖道門、意也、易行道者即是浄土門、意也、難行易行、聖道浄土、其言雖異、其意是同」

と『選択集』を引用し論証している。

しかし同一と言いながらも、難行道、聖道門からの展開であって、易行道、浄土門からの論ではないという疑問が起きる。聖阿は『二蔵義見聞』で

「問、今如所云、從難行道、頼教、中、開、出、易行道、頼教、聞、爾、者、約

行教相難易可レ云三本是一哉 約証教相之相頓即是淨土門 亦如レ此如何 答因二頓之言ニ而云、頓中有性相、拋、実而論、難行道頓唯性頓而已、此外相頓本、各別易行道、有也相頓即是淨土門、如此、可得、意也、總、分別、之、難行道、有、大小易行道、唯大也難行道、有、漸頓、易行道、唯頓也難行道、雖、名、頓、唯、是、性頓也、易行道、自、本、相頓也、然、則、大小相對之時、心、云、大乘即是易行道、漸頓相對之時、心、云、頓教即是易行道、而、亦、性相相對之時、正、可、云、相頓即是易行道、云、然、非、謂、難行道所開相頓易行道、約証教相之日、如此、此、心、得、意也、

と述べている。難行道では大小、漸頓など中に対比するものがあるが、易行道即ち浄土門は唯だ相頓のみが存在するのであり、これが「菩薩藏頓教」の浄土宗であると論じている。

この二蔵二教判は

「拋、実而論、二蔵二教不三互為三本末、各各教相、也若二蔵為二教相、時、浄土即是菩薩藏、取若二教為二教相、時、声聞藏教亦是漸教、浄土即是頓教、撰也一家高判其義分明、」

と云ふ、三師教相義のところ、既に善導の教判を「二蔵及び二教」といつていることから判るように、善導の二蔵二教判は本末関係によって組織化されたものではなく、当時一般的教判であった頓教という面から、浄土の教義を再考したものと聖岡は見ていたと考えられる。この意味からも、聖岡の二蔵二教判もこの善導の教判と云われるものを前面に出した

聖岡頓教判の成立について（服部）

がら、同様の作業が行なわれたことを推考出来るものである。

聖岡はその教判の中で頓教を性頓と相頓の二頓に分けているが、この二頓の名は浄土列祖の釈義に見ることが出来ず、伝菩提流支作とされる『麒麟財立宗論』の名目より取ったものと思われる。

性頓については天台、真言、禪の各宗をあげ、相頓との差異は「今時難証」の立場からなっており、機根のとらえ方であると述べている。

相頓の内容については、

「隔時頓人不必定隔時不レ云三必須、故是一重勝也、大原又直成頓破成三隔時教門アレトモ未断惑頓壞成三断惑教門無レ之サレバ互相取レ有レ勝劣二直成隔時勝劣破易云二必須捨報、故断惑未断惑勝劣壞難云三不断煩惱、故是一重勝也、選、況彼頓悟頓自力難行、故雖レ談二頓悟、頓悟者少此頓生頓佗力易行、故如レ談二頓生、頓生多億衆生未有一人得者皆悉到不退転南北任二人意、是三重勝也、安樂、」

と、浄土の頓教即ち相頓三重勝があることを、「大原問答」「選択集」「安樂集」等を論拠としてあげ、その勝劣を煩惱の断未断、彼土往生と此土成仏、時間の長短の関係によって示している。

内容については

「相頓即是易行道、往生無生浄土門、他力秘術仏意教、即相不退、」

頓中頓^{カノナラフ}

とある四句の命題について、四句相連九義転成によってあらわし、

「所レ謂^{ハク}以^テ相頓^ニ故^ニ是^レ易行道^{ナリ}易行道^ノ故^ニ即^チ得^テ往^リ生^ニ若^シ得^テ往^リ生^ニ速^ニ証^ス無^レ生^ニ無^レ生^ニ即^チ是^レ淨土門也淨土門^ニ是^レ力他^ノ秘術所^{ナリ}言^フ他力^ニ是^レ仏意^ノ教^{ナリ}仏意^ノ教^ニ故^ニ即^チ相不退^リ即^チ相不退^リ名^ニ頓中頓^ニ頓中頓^ニ故^ニ即^チ是^レ相頓^{ナリ}」⁽¹⁾と、各々の語句の内容が関連して相頓教が成立していることを云っている。

この「頓中頓」と言った場合、前の頓と後の頓との意味は異なっている。前の頓は善導が『般舟讚』に「或は頓」といった時の全体をとおしての頓教であり、聖岡のいう相頓、性頓を含めた頓教の意味である。後の頓は一般的に使われる頓ではなく、凡夫のために別開された究竟一乗の頓教を意味するものであり、易行道、他力の秘術を開頓した頓教とすることができる。

以上の様に広狭二面から頓教を見たが、この聖岡頓教の成立を考えるならば、三祖良忠においても『観経疏伝通記』に「道理互存偏立^ニ成^リ失^フ凡^レ於^テ如来^ノ一代^ノ教^中総^ニ判^シ教相^ヲ或^チ立^テ三大^ノ小^ノ或^チ立^テ漸頓^ニ或^チ立^テ三門^ニ各^ニ撰^シ二代^ノ俱^ニ收^メ諸教^ヲ何^レ論^ニ本来^ニ」⁽²⁾と云っているように、この頓教判は一代仏教の単なる組織化を目的としたものではなく、相頓淨土門の開頓のために、善導に示されるところの「二藏二教」を網格とし聖道自力の頓

教との異なりを明確にするために立てた頓教判であると位置づけることが出来る⁽³⁾。

既に旭蓮社澄円には聖道淨土兩頓論、幸西には二藏二教二頓（聖頓、凡頓）があり、対他というものも含めた方法論として同時代に存在していたと云うことができ、これに導かれたとも思われる。

前述のように、善導から法然、聖光、良忠と継承された頓教観は唯頓であり、この頓教観に順じて諸宗に対抗する意味からも、煩惱の断未断、彼土往生と此土成仏、時間の長短の三点から、相頓教を出発点として聖岡の頓教判、二藏二教判が形成されたものと云える。

- 1 淨全二卷 三頁。
- 2 〃 一五七頁。
- 3 『釈淨土二藏義』淨全十二卷 二二頁。
- 4 齊藤晃道稿「善導教学における頓教攷」『仏教文化研究』二六号）参照。
- 5 淨全九卷 三一五頁。
- 6 淨全十卷 一五四頁。
- 7 淨全十二卷 一六頁。
- 8 同 二一頁。
- 9 同 一七頁。
- 10 同 三七〇頁。
- 11 同 二二頁。
- 12 同 七四五頁。
- 13 同 二二五頁。
- 14 同 一二五、一二六頁。
- 15 淨全二卷 一五八頁。
- 16 拙稿「聖岡教学における性頓と相頓」『仏教論叢』第二三三号）参照。

（大正大学総合仏教研究所研究員）